

1. 本講座のねらい

民主主義と軍事技術の観点から戦争を歴史的に理解する。
戦争に至る動機を科学的に理解する。

2. 民主主義とは？

- ・民主主義の定義 (Dahl 1971)
公的異議申立て (政治的自由+選挙)
包括性 (普通選挙権)
- ・流血なしに紛争を解決する制度 (Popper 1962; Przeworski 1999)

3. 民主主義と戦争の歴史的関係

A) 古代ギリシャ (橋場 1997; 猪口 1989; アリストテレス 2001)

a) 重装歩兵の密集戦法

武具を自弁できる市民の権利意識・政治力の拡大

b) 三段櫓船による突進

武具を自弁できない貧しい市民も動員

→国家に関与する市民=民主政+戦争

B) 中世と近代 (Wright 1964; カイヨワ 1974; 猪口 1989)

a) 騎士階級と農民の兵農分離

武具の調達や戦闘技術の高度化による世襲=封建制

b) マスケット銃の発明

騎士から歩兵へ

c) フランス革命

参政権と徴兵制が同時に成立

C) 19世紀以降 (van Creveld 1991; 猪口 1989)

大規模動員・後方支援・女性参政権

1830年代の鉄道と電信の発明やコミュニケーション技術の発達

→補給体制・女性の動員の重要性

→女性の社会的地位の向上や参政権の拡大

D) 戦争の数学モデル

リチャードソン・モデル: 軍備競争下における各国の軍事費の変化を自国と相手国の軍事費の関数と考えたモデル

ゲーム理論: 「囚人のジレンマ」と「安全保障のジレンマ」

E) 現在の戦争 (Mueller 2004)

a) 「警察型戦争」(policing war)

ヴァーチャル・ウォー
「仮想の戦争」(イグナティエフ 2003): 1999年のコソボ空爆
人道的理由と戦費削減

→兵士同士が実際に戦わない現実感のない戦争

→現実感のない戦争に対して市民は行政府を抑制しつづけるか

b) 内戦：住民の財産の収奪や性的暴力といった犯罪的な行為

←→21世紀の「アラブの春」

F) 民主主義の母としての戦争（猪口 1989: 19-23）

民主主義の起源：従軍と市民権とが連動

権利の擁護と破壊を基本とするという矛盾

政治参加と国防への参加は、市民が国家に対して関与する面では同義であり当然。

「法のまえでの平等は、兵役義務の平等でもあった」（カイヨワ 1974, 120 頁）。

G) シビリアンの戦争（三浦 2012）

参考文献

Mueller, John E. 2004. *The Remnants of War*. Ithaca: Cornell University Press.

Popper, Karl. 1962. *The Open Society and Its Enemies*. London: Routledge and Kegan Paul.

Przeworski, Adam. 1999. "Minimalist Conception of Democracy: A Defense." In *Democracy's Value*, eds. Ian Shapiro and Casiano Hacker-Cordón. Cambridge: Cambridge University Press.

van Creveld, Martin. 1991. *The Transformation of War*. New York: Free Press.

Wright, Quincy. 1983[1964]. *A Study of War*. 2nd ed. Chicago: University of Chicago Press.

アリストテレス（牛田徳子訳）. 2001. 『政治学』京都：京都大学学術出版会.

猪口邦子. 1989. 『戦争と平和』東京：東京大学出版会.

カイヨワ, ロジェ（秋枝茂夫訳）. 1974. 『戦争論—われわれの内にひそむ女神ペローナ』東京：法政大学出版局.

ダール, ロバート・A（高島通敏・前田脩）. 1981. 『ポリアーキー』東京：三一書房.

橋場弦. 1997. 『丘のうへの民主政—古代アテネの実験』東京：東京大学出版会.

三浦瑠麗. 2012. 『シビリアンの戦争—デモクラシーが攻撃的になるとき』東京：岩波書店.